『平家公達草紙』「青海波」成立に関する小考

重政　誠

［キーワード　①平家公達草紙　②安元御賀記　③藤原隆房］

在りし日の平家の栄華を描いた作品に、『平家公達草紙』がある。草紙といっても、白描の絵巻物になっており、現存するものでは次の三種が挙げられる。

第一種

佐藤千寿氏旧蔵本――詞五段・絵四図
現在では一・二・三・五段が福岡市立図書館（松永記念館旧蔵）、第四段が故・前田青邨画伯宅に分蔵されている

第二種・幕末の模本

東京国立博物館本――天保三年（一八三二）狩野養信写
詞六段・絵九図
金刀比羅宮図書館本――冷泉為恭写　東京国立博物館本と同内容
小川寿一旧蔵九曜紋文庫本――天保十四年（一八四三）西田直養写
金刀比羅宮図書館本の詞書の写しで絵は無し

第三種

宮内庁書陵部本――詞三段・絵なし

現在最も入手しやすい『平家公達草紙』である、岩波文庫『建礼門院右京大夫集』の付録には、二種本を東京国立博物館本で翻刻した十三段（一種本の故・前田青邨画伯蔵のものを除く）が載せられている。

『平家公達草紙』の成立については諸説あるが、本論では兵藤裕己氏[1]による、語り口の違いなどから三種伝本がそれぞれ相互無関係に、個別に成立した作品だったのではあるまいかとす

る説を受け、ここでは三種本を同一線上では扱わず、『安元御賀記』との関係から注目される、第一種本の松永記念館旧蔵福岡市立図書館本の中の「青海波」の段を特に検証したい。

この段は、群書類従に載る藤原隆房作とされる『安元御賀記』との関係から、『平家公達草紙』が藤原隆房の手によるものではないかという論（中村義雄[2]・桑原博史[3]）の骨子となる段である。まず、『平家公達草紙』本文を検証する前にその資料として大いに使用されたであろう、『安元御賀記』について考察してみる。

『安元御賀記』との関係

後白河法皇五十歳を祝う御賀を記した『安元御賀記』には、群書類従に収められている、藤原隆房作といわれる『安元御賀記』と、定家の書写した『安元御賀記』（以下、類従本・定家本と表記）がある。これまでの研究では、親・平家色の強い類従本が先行して成立し、後の歴史的事情で親・平家色を廃した定家本が写されたと考えられていた。しかし、伊井春樹氏[4]の論により記述に矛盾の多い類従本のほうが、定家本よりも後の成立とする論が出され、私もそれを支持するものである。

ただ、伊井氏は定家本を安元御賀直後に描かれた記録とし、それ以降の平家都落ち以前に平家の栄華に奉仕するものとして、類従本を位置付け、さらにはそこから『平家公達草紙』が作成されたが、類従本・『平家公達草紙』ともに誤りが多い事から隆房の手によるものではないとの結論を出しておられる。しかし、類従本を平家の都落ち以前に、平家に奉仕するために書かれたとする論は、少々性急に過ぎる気がする。もし、平家の都落ち以前に描かれたものであれば、なおのこと官位などの誤りは少ないはずではあるまいか。私は、定家本の先行性は認めつつも、やはり類従本を平家滅亡後の隆房の手によるものであると考えたい。

『平家公達草紙』

『平家公達草紙』の成立に関する先行研究として、中村義雄・桑原博史氏の「隆房が中心となって、平家の思い出を共有する人物たちが集まり執筆した」とする説や、中野幸一氏[5]の「隆房を資料提供者の一人にとどめる」論などがあるが、私は、その両方とも正解であると思う。すなわち、隆房は執筆・編集者でありながら資料提供者の一人にしかなれなかったのである。

桑原氏は、「隆房による晩年の、閑居のつれづれになされた計画であり執筆」として、『平家公達草紙』（氏は最初から絵巻形態であったと考える）の作者・編集者を藤原隆房としておられるが、私は隆房は蒐集はしたものの、隆房の手によっては完成には至らなかったのではないかと考える。そして未完成の平家公達の物語資料を、草案の段階なので『平家公達草紙』と名づけ保管していたのではないだろうか。そして、その隆房が、蒐集した資料の中で隆房自身の手によるものが、類従本『安元御賀記』ではないのだろうか。私は、群書類従本『安元御賀記』も、隆房が執筆、蒐集した雑多な原『平家公達草紙』の、

一部であると考える。そして、隆房蒐集の原『平家公達草紙』が四条家に伝わり、後年四条家に浅からぬ縁のある者が『平家公達草紙』絵巻を作成・完成させる際に、この隆房の手による類従本『安元御賀記』が資料として用いられたのではないかと考える。

また、藤田一尊氏[6]は、桑原博史氏の

隆房が中心となって、みずからの回想を記述するとともに、近臣あるいは友人関係の人で回想の記述のできる人にも執筆させ、あわせて一部の書となしたのが原本であろうと想像するのである。もとより大まかな枠は協定したであろうが、細部においては執筆した人の、話題の主に対する親疎のちがい、伝聞か直接経験かのちがい等は、そのままにしたのが、かかる性格のちがいを生じたのではあるまいか。

との結論[3]を受けて、隆房中心の執筆者グループを推測された。そして、『平家公達草紙』と『建礼門院右京大夫集』の関連性・類似性に注目し、建礼門院右京大夫をそのグループメンバーの一人と仮定された。そして、『建礼門院右京大夫集』にある、隆房と建礼門院右京大夫の交流を示す詞書からその時期や背景を想定しておられる。

隆房の中納言の、なげく事ありて、こもりゐたるもとへ、これば かりは、昔のこともおのずからいひなどするひとなれば、とぶらひ申すとて、五月五日に

（『建礼門院右京大夫集』一四四段）

この詞書の「なげく事ありて、こもりゐたる」の解釈を「彼より下位の中納言であった藤原忠経が権大納言に昇任したことに抗議する」籠居であると推測し、「昔のこと」の解釈を、自分が清盛の娘婿として明るい未来が約束されていた平家全盛時代とし、建礼門院右京大夫と語り合っていた仲であるとされた。

私も、概ね藤田氏の意見に同意する。付け加えて言うならば、西園寺実宗も同時期に、源通親に出世を妨害され、平家時代を懐古していた仲間である。藤田氏は、『平家公達草紙』の成立に関して

藤原隆房という人物は『平家公達草紙』に重要な意味を持ってえがかれているばかりではなく、平家の時代とそこに生きた公達を懐しく思うような理由を合わせ持っていた。そして、彼が籠居して、十分すぎる時間を得た時、彼の回りには同じような懐古の情を持った人々が存在していたのである。稿者は、奏した人々の手によって、この正治二年（1200）から元久元年（1204）の間に、『平家公達草紙』の原本（絵は無くても構わないと思う）、もしくはその原型となるものが出来たのではないかと推測する。

と結んでおられる[6]。わたしも、この藤田氏の指摘のように隆房

籠居中、もしくは引退後に建礼門院右京大夫、藤原実宗、維盛北の方、その他平家に仕えた女房達らと共同執筆したもの、藤田氏の言う所の「原型となるもの」を隆房が持っていたのではあるまいかと考える。

そして、やはり忘れてはならないのは『平家公達草紙』も小松家を中心として描かれた作品であるということである。中野幸一氏の言葉[5]を借りるなら、

而して、「平家公達草紙」十四段十三図（詞書欠の段もあり）が織り成す世界は、それ自体王朝末期の文学圏を示すものと考えられえる。その中核となるものは、建礼門院徳子を中心とする高倉帝の後宮サロンと、それを援護する平氏一門、**とりわけ人望の高い小松内大臣重盛を中心とするサークル**であったと思われる。清盛の娘婿であった隆房もまたこの圏内の一員であるということはいうまでもない。隆房の「荒玉年月（艶詞・隆房集）」や「安元御賀記」をはじめ、「建礼門院右京大夫集」「建寿御前日記（たまきはる）」「子侍従集」などの同時代の文学作品は、いずれもこの文学圏で醸成されたものであり、勇壮な「平家物語」に優雅なみやびを添える王朝的な佳話哀話も、この平家文学圏から生じたものが少なくないであろう。また「平家人物論」「平家花揃」などの後代の作品や、あるいは「艶詞絵巻」「承安五節図」「平家盛衰図」などの絵巻絵図類も、広い意味でこの文学圏から生み出されたものと考えてよいだろう。

ということである。『平家公達草紙』の現存する一三段の話のうち、実に九段が小松の公達を話の中心に据えている。小松の公達以外では、重衡が多く登場し。維盛・重衡・資盛でほとんどの段をカバーしている。それは小松家を中心とする文学圏（重衡も含む）を懐かしむ環境の中で、その元メンバー達が綴った懐古集が、隆房の蒐集した原『平家公達草紙』だったのである。

先に引用した『建礼門院右京大夫集』には隆房について

こればかりは、昔のこともおのづからいひなどする人なれば

とある。この二人が話す「昔のこと」とは、平家全盛期のまさに『平家公達草紙』が取材した世界に違いないであろう。

「青海波」の段

『平家公達草紙』の「青海波」の段が、類従本『安元御賀記』と一字一句たがわぬ部分が全編を通じて見られることから、類従本を傍らに置きつつ記されたであろう事は疑うべくもない。ただ、官位の違いやその場に居ないはずの平家公達の挿入などが見られることから、他の段を作成するべく集められた緒記録

を見比べて、類従本『安元御賀記』の官位の誤認に気付き、『平家公達草紙』作者による、更なる誤認による訂正が加えられたのではないだろうか。

類従本『安元御賀記』と『平家公達草紙』は共に、維盛が青海波を舞い

人〳〵皆恥ぢたる気色也。

と、感想があり、青海波についての描写は終わる。「青海波」を主題に描くのであれば、ここでこの段を終わってもかまわない。いや、むしろ終わるのが自然であろう。しかし、『平家公達草紙』は、『安元御賀記』の引き写しを続け、

又右に、新少将通盛、四位侍従有盛、林哥を舞ふ。時に院の御前より、右大臣兼実して、禄を給ふ。蘇芳の織物の袿、各右の肩にかけて、入綾を舞ふ、見る物こと〳〵く涙を流す。青海波こそ猶目もあやなりしか。

と続く、ここまでは、まだ通盛・有盛の平家公達が舞う姿を描くのでおかしくはない。しかし、『平家公達草紙』はまだ続きがある。しかしながら、ここからは『平家公達草紙』による類従本『安元御賀記』の引き写しは一度途絶え、平家公達が出てこない部分を大幅に省略、変更して、また維盛が安名尊を歌い

よにめづらしき声づかひどもにて乱れたりしかば、おの〳〵禄給ひたり。

と、維盛が賛美された場面だけを載せる。ちなみに、この部分には、類従本『安元御賀記』にはない、宗盛が和琴を担当する描写もある。

そして、後宴後の恩賞の場面へ移り、また『安元御賀記』の引き写しが始まる。本当ならば、話の流れ的にも、維盛が舞い終わった時点、もしくは通盛・有盛の平家公達が舞い終わった時点で「青海波」の段を終えてよいくらいであるが、何故途中に中略を入れてまで、この段を引きずるかと言えば、『安元御賀記』の最後にある、恩賞の場面で隆季が

また、按察資賢を御使にて、隆季卿に、「今度の御賀事故なく遂げぬるは、なんぢが事を行うゆゑ也。殊に神妙也」と仰せ下さる。

と、平家と共に院のお褒めに預かった記事を入れたかったがためである。平家を褒め称えつつも、四条家の優位を語らねばこの段は終われないのである。これは、やはり四条家関係の人物の意向が働いた状況で、『平家公達草紙』が製作されたからであると思われる。

では、四条家に浅からぬ縁のある、現存する第一種本『平家公達草紙』絵巻を作成したのは誰であろうか。角田文衛氏[7]が桑

原博史氏の論を受け、『平家公達草紙』の編集者を疑いなく隆房とし、絵巻にしたのが北山准后貞子であると推測されたが、明察であろう。私は、隆房の遺産の原『平家公達草紙』を完成させたのは、隆房の孫の北山准后のサロンであったのではないかと考える。

北山准后の時代

平家一門が壇ノ浦の藻屑となって三十数年後、安徳天皇の異母弟である後鳥羽上皇が引起こした承久の乱は失敗に終わり、それまでの宮中の力関係も一変した。鎌倉方が指名した都の執政は西園寺公経であった。西園寺公経は、鎌倉幕府と連携を保ち、都で権勢を振るうことになる。そして西園寺家に連なる四条家、御子左家、持明院家なども、平家と血縁関係にある者達が、権力の座に付く事になる。平家の歌人が勅撰集に顔を出し始めるのもこの辺りからである。

そして、その時代に権勢を振るい、一大サロンを作り上げたのが、西園寺実宗の孫実氏の正妻で、藤原隆房と清盛の娘の子で平家の血をひく四条大納言隆衡の娘貞子、後の北山准后である。北山准后は、晩年の祖父隆房の姿を見て育ち、自らも祖父が憧れてやまなかった平家の血を引くことを自負して育ったであろう。北山准后は実氏との間に後嵯峨帝の后となる大宮院を設けた。その大宮院の子達が、後深草・亀山両帝なのである。西園寺家が都で権勢を欲しいままにして数十年。弘安八年に、北山准后の九十の賀が営まれた。このときにも、後白河法皇の五十賀の資料である『安元御賀記』は有効に活用された事であろう。

北山准后の活躍した後嵯峨朝の理想とした時代は、自分達の先祖が活躍した、平家全盛期であり、院政全盛期であり、最後の貴族文化が花開いた平安末期の後白河院・高倉天皇時代であった。そして、彼らの家には、その理想の時代に描かれた、自分達の先祖が物語世界の主人公を気取り、貴族生活を謳歌していた記録である原『平家公達草紙』が残されていた。後嵯峨朝時代の人たちが、高倉朝の時代を真似る時にそれらの作品は、貴重な資料として役立ったはずである。

『増鏡』にみられる安元御賀についての記述

第一種本の『平家公達草紙』の成立年代に関して、南北朝以降という論も存在するが、私は、先ほど引いた『増鏡』の記事から『平家公達草紙』の成立年代はもう少し早い段階のやはり、北山准后の時代であったと考えたい。

今年、北山の准后九十にみち給へば、御賀の事、大宮院思し急ぐ。世の大事にて、天下かしがましく響きあひたり。かくののしる人は、**安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房の大納言の孫なめり。**鷲尾の大納言隆衡の女ぞかし。大宮院・東二条院の御母なれば、両院の御祖母、太政大臣の北の方にて、天の下みなこのにほひならぬ人はなし。いとやんごとなかりける御宿世なり。昔、御堂殿の北の方鷹司殿

と聞えしにも劣りはず。　（『増鏡』巻十　老のなみ）

注目すべきは、「安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房の大納言」と言う記事である。では、『平家公達草紙』の本文ではどうなっているか。

輪台はてて青海波出で替りて舞ふ。**権亮少将維盛、右少将成宗**、ともに右の肩を脱ぐ。あをうちの半臂海浦の文、螺鈿の細太刀、紺地の水の文の平緒、桜萌黄の衣、山吹の下重ね、胡簶をときて、老懸をかく。山の端ちかき入日のかげに御前の庭の砂子ども白くきよげなる上に、花の白雪空に知られて散りまがふ程、物の音もてはやされたるに、青海波の花やかに舞ひ出でたるさま、維盛朝臣の足踏み袖振る程、世のけいき、入日のかげにもてはやされたるかたち、似る物なくきよらかなり。同じ舞なれど目なれぬさまなるを、内、院を始めたてまつり、いみじうめでさせ給ふ。父おとゞこと忌みえし給はず、おしのごひ給ふ、ことわりと見ゆ。見る人涙を流す。片手は源氏の頭中将ばかりだになければ、中々にかたはらいたくなん覚えけるとぞ。舞おはりて、はじめのごとく連なりて楽屋に入る。たゞし輪台の舞人は立ち加はらず。

かくて入る程に、**右舞人少将隆房**、大鼓の前より楽屋に進み寄りて、中将泰通にいはく、「大鼓はあげらるまじきにや、いかゞ」。此の時にはかに大鼓をあぐ。青海波はつる時の大鼓、世の常はあぐることなし。きはまりなく、ゆゆしく舞ひたる時あぐる事也。先の仁平の御賀に、中院右大臣、成通大納言、ともにいひあはせてあがさせたる。この度もゆゆしく舞ひたらばあげよと、院の御方より仰せ事ありける。しかるべき笛吹きの思ひ忘れにけるなるべし。「かくおどろかさずは、さてあげで」せやみなましとて、ひと〳〵皆恥ぢたる気色也。　（『平家公達草紙』「青海波」）

『平家公達草紙』では、青海波を舞ったのは維盛と成宗であり、隆房は後半に維盛の舞が素晴らしかった事を強調する役目で登場するだけである。類従本の『安元御賀記』も数文字違うだけで、全く同様の記事であると言ってよい。

この真偽を確かめるために、同時代の日記『玉葉』にある、安元御賀の青海波の記事も引いておく。九条兼実は『玉葉』を有職の書として、後世に伝えようとした事もあり、作法に関しては徹底して細かく、そこには創作の入る余地は無い。また、摂関家の自負からか、他人の疑わしい作法に関しては非常に細かく厳しい。

相次ぎ右大将（重盛）一族の公卿を率ゐ（宗盛、時忠、頼盛、教盛、信隆等なり）、楽屋に向かふ。将軍対代の南階より降り、宗盛以下中門の廊の南妻より降り、共に池畔を歴て、鉦鼓の北より楽屋に入り了んぬ。これ青海波の装束を扶持せんがためなり。その装束の垣代未だ出でざる間、

各本の路を歴て座に復す。

〈中略〉

輪台了んぬ。**青海波出づ（輪台入る間、須臾に替り楽屋を出で、同時に青海波を賁め吹く。維盛西に在り、成宗東に在り。**共に青打海賦半臂を著け、螺鈿の細剱を帯ぶ。右袒、自余元の如く胡籙を帯びず。）舞ひ出で、六遍唱歌を詠ず。皆試楽の如し。但し笙笛違乱無し。隆季資賢の唱歌に付き笙を吹く（今度、光近の唱歌聞えずと云々）。仍つて楽竟るに至り、同時に音止むる者なり（実国付く所成親に異ならず）。舞了り、隆季以下楽屋の座に復す。

（『玉葉』安元二年三月六日条）

安元の御賀で、青海波を舞ったのはやはり維盛と成宗であり、『平家公達草紙』の記事が正しい。この事から推察するに、『増鏡』成立時期には安元の御賀で青海波を舞ったのは隆房であるというイメージが出来上がっている。共に舞ったと考えられていた相手は、もちろん維盛の方であって成宗ではないだろう。では何故、隆房が青海波を舞った事になっているのか。それはもちろん四条家の、特に北山准后の権勢によるものである。彼女は敬愛する祖父隆房が書き記した内容を大きく変えてまで、『平家公達草紙』絵巻を創作する気はなかった。しかし、彼女の強大な権勢がこの時代に作られた絵巻『平家公達草紙』を四条家・隆房の栄華とも結び付けられ、後年『増鏡』の時代には青海波を舞ったのは維盛と隆房であるとイメージされるようになったのである。逆に考えると、敬愛する祖父の作品を大切に考える北山准后が『平家公達草紙』絵巻を制作しなければ、それ以降の維盛と隆房が青海波を舞ったとイメージされる時代には、やはり維盛と隆房が青海波を舞う『平家公達草紙』が創られていたのではないだろうか。

まとめ

安元御賀の後、まず最初に公式記録として、定家本の元になる『安元御賀記』があった（隆房の手によるものかどうかは不明）。それは平家に傾倒する事のないきわめて公式なものであり、定家はそれを写した。これは安元御賀の直後に記されたものであろう。

そして、後年隆房が平家懐古の草紙を編纂する時に、新たに平家に傾倒した類従本を作り、隆房の意匠により実際は参加していない公達なども多く挿入したために、矛盾と混乱が生じる内容となった。官位の混乱なども、後年の隆房による誤認であろう。あるいは、隆房筆の『安元御賀記』が定家の手に渡った段階で隆房は、自分の手元に置くために、平家一門に傾倒する類従本『安元御賀記』を非公式なものとして執筆したのかもしれない。どちらにしても、定家本の元になった『安元御賀記』は隆房の手元になく、さまざまな混乱が生じたのであろう。

そして数十年後、隆房の孫・曾孫の代である、後白河院時代を回顧する時代に、白描絵入りの『平家公達草紙』絵巻が、隆房が蒐集した平家公達に関する諸記録（原『平家公達草紙』）

から作成された際に、隆房の記した類従本『安元御賀』の後宴を中心に「青海波」の段が作られた。それは、隆房を維盛の青海波の相手にこそしなかったものの四条家の面目を保つものであった。

後年、『増鏡』が著された時代には、『平家公達草紙』絵巻が作られた当時の四条家の権勢や『建礼門院右京大夫集』などに登場する隆房の頭中将的な役割から、維盛とともに青海波を舞ったのは隆房であると言うイメージが広がっており、『増鏡』作者の誤認による記事が生まれたものと考える。

本文の引用は以下に拠る

・『建礼門院右京大夫集　付平家公達草紙』
（久松潜一・久保田淳校注、岩波文庫、一九七八年三月）
・『建礼門院右京大夫集・とはずがたり』
（新編日本古典文学全集47、小学館、一九九九年十二月）
・『神皇正統記・増鏡』
（日本古典文学大系87、岩波書店、一九六五年二月）
・『安元御賀記』群書類従

引用論文

(1) 兵藤裕己「平家公達草紙」
（『物語文学の系譜Ⅲ』、有精堂、一九九一年七月）
(2) 中村義雄「平家公達草子と藤原隆房―青海波の段の出典を中心として―」
（『美術研究　215』一九六一年三月）
(3) 桑原博史「藤原隆房の生涯とその作品」
（『中世物語の基礎的研究』風間書房、一九六九年）
(4) 伊井春樹「『安元御賀記』の成立―定家本から類従本・『平家公達草紙』へ―」
（『国語国文』第六十一巻、第一号、一九九二年一月）
(5) 中野幸一「平家公達草紙をめぐって」
（『軍記物とその周辺』早稲田大学出版部、一九六九年三月）
(6) 藤田一尊「『平家公達草紙』の成立に関する一考察―『建礼門院右京大夫集』を資料として―」
（『日本文学研究』一九八八年三月）
(7) 角田文衛『平家後抄』上・下
（講談社学術文庫、二〇〇〇年六月）

参考論文

・春日井京子「『安元御賀記』と『平家公達草紙』―記録から〈平家の物語〉へ―」
（「伝承文学研究」四五号、一九九六年五月）
・桑原博史「隆房と隆信―平安朝末期の物語愛好の精神にふれつつ―」
（『平安文学研究』一九六三年六月）
・松尾葦江「平家公達草紙小考」
（「平家物語論究」明治書院、一九八五年三月）

・馬場淳子「『平家公達草紙』の維盛像」
（小峰和明編『平家物語の転生と再生』笠間書院、二〇〇三年三月）
・藤田一尊「藤原隆房のなげき―『建礼門院右京大夫集』私見―」
（『解釈』一九九〇年四月）
・藤田一尊「『建礼門院右京大夫集』私見（二）―作品成立の背景―」
（『解釈』一九九一年三月）

（しげまさ・まこと　博士後期課程）